

城下町探訪 18

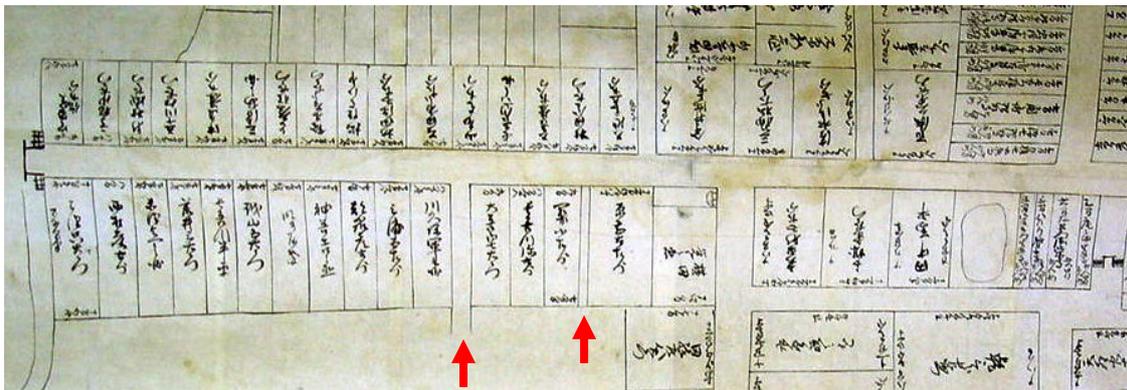
2009/7/30

お か ち ま ち 高橋家と御徒士町

平成21年5月御徒士町の高橋家住宅が一般公開されるはこびとなりました。

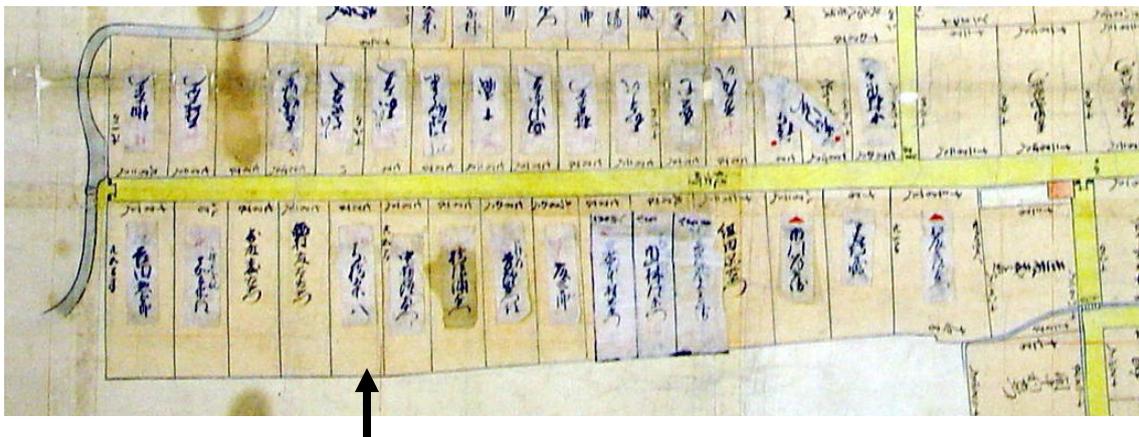
1 御徒士町のこと

御徒士町は「信府統記」によれば元和3年戸田氏が松本へ入封し「安原町の西に歩行屋敷を建る、同所の北に足軽町を建る」とあり元和3年(1617)頃成立していると思われ
れます。元禄期松本城下絵図の御徒士町の様子は以下のようなようです。信府統記によると



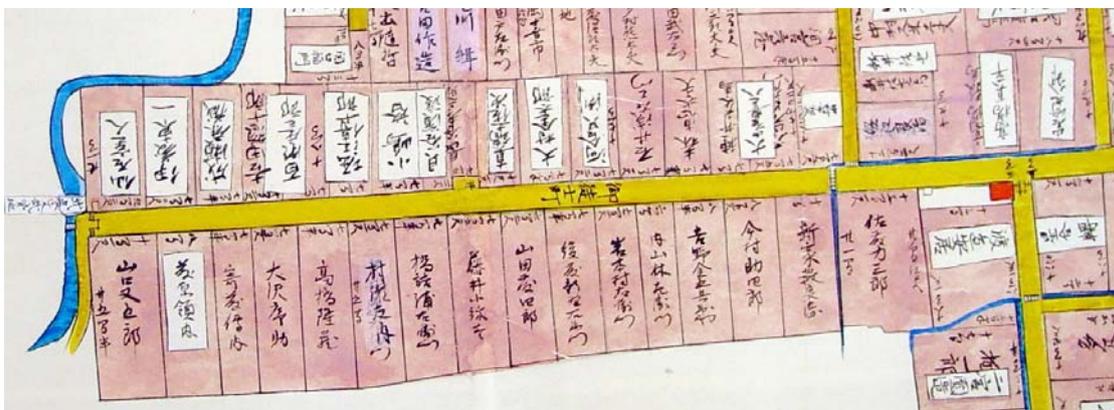
御徒士町北側には19軒、南側には15軒 合計31軒の屋敷が並んでいました。長さは127間余(231・14m) この時代は水野時代です。北側には2つの矢印の位置に小路がありました。

次の御徒士町の地図は「享保十三年秋改松本城下絵図」です。これは戸田氏が享保10年に松本に再入封した直後にあたり高橋家はこの時から明治維新まで同じ屋敷に住んでいました。武士の屋敷は藩の所有であり修理は藩費をもってなされました。廃藩後、居住地は住人に払い下げられ私有となりました。

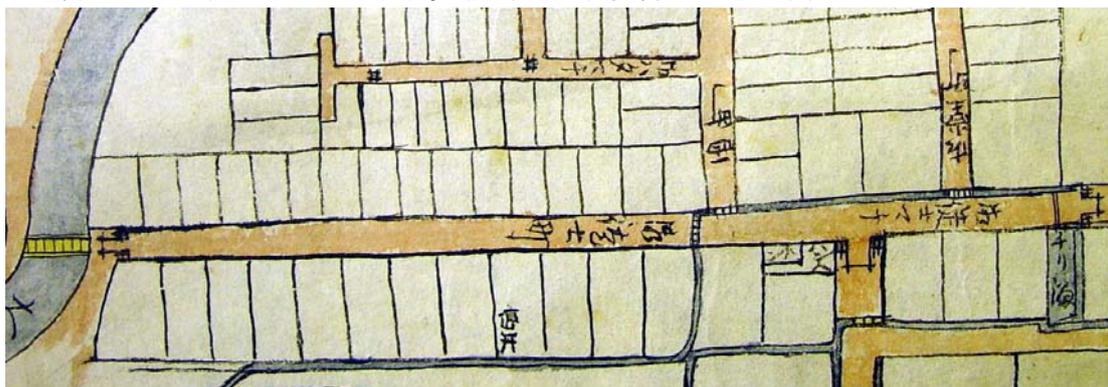


南側16軒となっており、南側は小路を無くして1軒増やしています。高橋家は「高橋条八」の名前が南側西から五番目のところに見えます。条八は4代高橋安澄のことです。

「天保六年松本南北深志絵図」についても家数の変化は見られません。

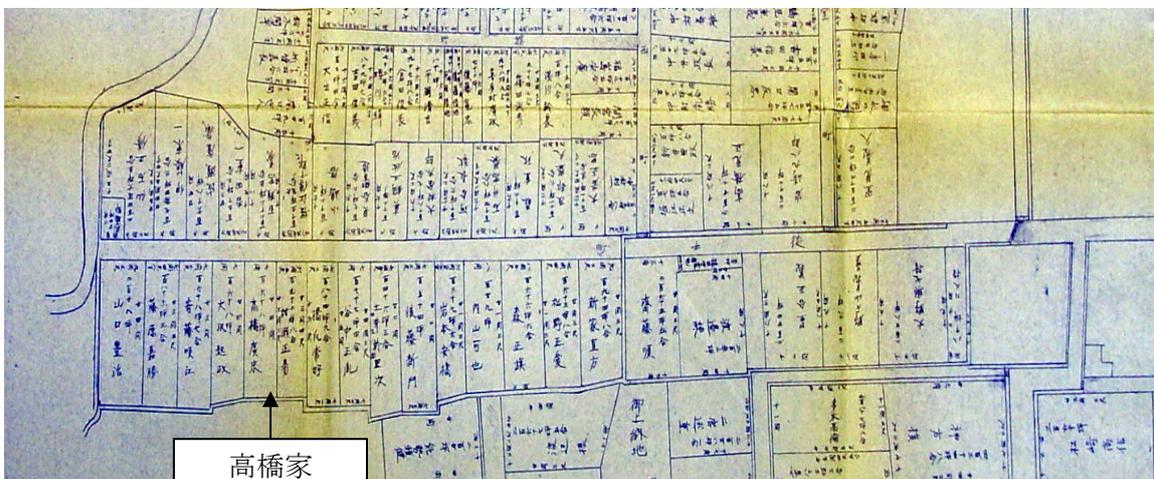


田町の角には番屋があり、御徒士町の西はずれには木戸が構えられていました。高橋家は高橋隆蔵の名がみえます。屋敷の広さは間口7軒半（13・65m）奥行きおよそ25間半（46・41m）という細長い屋敷でした。享保の絵図では顕著でないが天保の絵図では辻井戸が1つ設けられています。（隆蔵は5代安昇の^{やすのり}ことです）



前頁、文化年間作成と推定される城下絵図では御徒士町の範囲が明確に示されています。木戸が西と東に設置され、内山氏の屋敷内には屋敷神（稲荷）が描かれています。注目すべきは東の木戸脇に「チリ溜」があることである。（この内山氏の稲荷社は田町側に移され現存）

明治五年松本侍町図

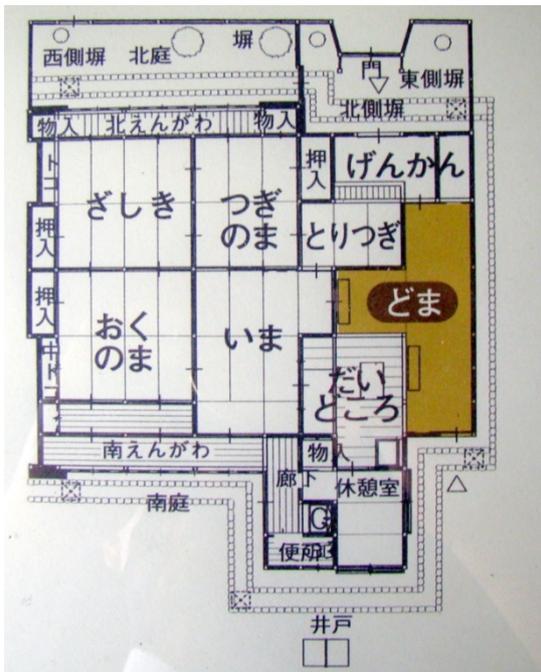


2 高橋家住宅 松本市開智2丁目9番10号

高橋家は延宝7年（1679）初代が加納において戸田家の家臣となっています。4代安澄やすずみから御徒士おかちに取り立てられ優秀な官吏として藩政の最前線に立って仕事をしています。安澄は、御預所つめや郡所に勤め千国番所や大町番所話、郷目付・御持筒支配を勤めました。5代安昇やすのりは、文化13年（1816）山方奉行を勤めています。6代安基やすもとは、御目付と勘定所吟味役を兼帯し、藩主戸田氏の一族の旗本領である美濃北方代官も勤めました。7代淳安あつやすは御徒士として父安基と共に勤めていますから親子合わせて30石近い収入があったと思われる。



この住宅は享保10年（1725）前後の建築と推定され、現在に至まで火災の難をまぬがれてきました。昭和44年市の重要文化財に指定されました。その後、高橋家から松本市が寄贈を受け、平成21年5月改修復元が完了し一般公開のはこびとなりました。



左図は母屋の平面図ですが、「切り妻屋根の平入り」で、東西6軒半(11.8m)×南北4軒半(8・2m)で内部は玄関を入ると土間があり、その右側(西側)は十字に四つの部屋に仕切られた「四つ間取り」の形式になっています。各部屋には畳が敷かれており、天井は板張りで竿縁の化粧が施されています。

左図は今回復元された高橋家の平面図で、学芸員等が執務する場所が[休憩室]という名称になっていますが、江戸時代この場所は廊下で繋がった雪隠があった所です。

屋敷の北側は御徒士町の通りに面し腰板の附いた塀がありました。入り口は母屋の東西のおおむねおおむねと平行な側面すなわち通りに面した北側に入り口が設けられている形式なので、「平入り」といいます。(もし、入り口が東側に有れば妻入りといえます)

松本藩の藩政の実務に携わった武士の官舎として、橋倉家とともに残された数少ない武家屋敷として今後とも大切にしていく必要があります。なお、高橋家は、水曜日と土曜日の週2回公開されています。ぜひ訪れてみてください。内部には高橋家の資料もが展示されています。入場は無料です。